

\*\*\*  
\*\*\* 最近雑誌事情 \*\*\*  
\*\*\*

季刊人間雑誌

雑誌は、一九七〇年代に入ると、読者の好みの多様化に対応して細分化し、趣味の雑誌や情報誌がふえてきた。また、印刷技術や映像文化の発達で、グラビアの多いビジュアルな雑誌が多くなった。この傾向は現在もなお増長されつつあるようだ。内容についてはいうと、前号でも指摘したように政治、経済、戦争、文学など総合雑誌が常にとりあげていたような記事が少なくなり、世相、スポーツ、趣味など、生活をエンジョイするための情報を多く扱うようになってきた。

そうしたなかで、草風館から発行されている『季刊人間雑誌』は一風変わった雑誌である。ミニコミのように偏ってはいるがミニコミといえず、総合雑誌ではもちろんなく、強いていえば、素材や方法は異なるが、めざすところはかつての『面白半分』や『話の特集』と同線上にあるように思える。前記二誌のように遊びの精神や自由な雰囲気はなく、もっと泥臭く、シビアではあるが……。

このことは、トビラに掲げられた出版者のことばと、一九七九年十二月の創刊号の目次をみれば明らかである。

トビラには次のような文章がある。

——わが身・ころもそのひとつである、あたりまえでふつうの人間の、やさしさと哀しみにみちた生き死にを、民族や国家と向きあひながら、記録を中心とする方法によって明らかにしたい。この仕事をとおして、人間に

ついでに知識でなく、その獲得によっておのれの生き方・死に方がわかるような八知慧の一片をでも読み手、書き手と共有したいと思う——出版者

ベストセラーとなった田中康夫の小説『なんとなく、クリスタル』に登場するポパイ少年やJ・Jガールには、「ダサイ」と一笑に付されてしまいうような文句ではあるが、『なんとなく、クリスタル』が、なんとなく売れて売れてしまうような今の時代だからこそ、このような、広告もとらないハードな雑誌が見直されてもいいのではないか。

創刊号の目次から主なものを拾ってみると、  
眉屋私記（上野英信）、亜砒鉞山（川原一之）、地獄の喧嘩花（松崎次夫）、ある戦後（宮下忠子）、あるサーカス一座の記録（西田敬一）  
新井奥遼ノート（林竹二）……など。

『眉屋私記』は、沖繩国頭郡屋部の眉屋という屋号の家に生まれ、圧政と貧困のなか、メキシコに渡って鉞夫となった山入端萬栄の一生を追う連載ルポ、最新第六号（八一年三月十一日春号）で、やっと萬栄の結婚となり、二二六ページに及ぶ大作はまだまだつづく。  
『亜砒鉞山』は、宮崎県土呂久の亜砒酸鉞毒事件、『地獄の喧嘩花』は水俣病と、ともに公害問題を扱った作品である。前者の、昔話を孫に話して聞かせるような語り口には、なんともいえない味わいがある。後者は、聞き書きという方法を取り、方言のままの記録が、チツンで働く一本気の労働者の怒りを生々しいものにしていく。『ある戦後』は、戦争によって妻と職を失う破目になり、山谷の医療相談室を訪れた男の苛酷な戦争体験と戦後史。『あるサーカス一座の記録』は、あるサーカス一家の歴史をとおして、日本のサーカスの

盛衰を浮き彫りにして面白く……。例えてみれば、『季刊人間雑誌』は、一枚の絵をみると、腕組みをして遠くから眺める人ではなく、絵の前にたずねずじっと一点を凝視している人である。一点を凝視しつづけることによって、よくその全体をとらえることができるように、ごく平凡に、あるいは虐げられて生きる人間を見つづけることによって、その背後の世界を浮かびあがらせようとしているように思える。